

2025年5月

「コリージュ」58号 目次

巻頭言 (1~3) センター長就任の挨拶 (3) 全国大学教育研究センター等協議会開催報告 (4) 第52回 研究員集会開催報告 (5) 国際会議参加報告 Academic Profession in the Knowledge- Based Society (APIKS2024 in Finland) (6~7) メタサイエンス勉強会開催報告 (7~8) 2024年度の公開研究会 (9~10) センター往来 (11) 新任者・離任者から一言 (12~18) 情報調査室だより (19)

巻頭言



教育学ディシプリンの大胆な進出を

— 大学の教育研究と改革のために —

寺崎 昌男

(東京大学・立教大学・桜美林大学名誉教授)

「先生、どこかで『シーケンス』の話がされたのですか？」

同僚の T 教授から真顔でたずねられたのは1993年秋のことだった。東大教育学部から移った立教大学文学部でのことである。同学部は10数年前に転出した私をふたたび招いて下さった場であった。

そのころ立教大学では、全学的なカリキュラム改革が計画されていた。一般教育部の教授会を解体して全教員が各学部に分属することを前提とした作業であり、1991年の大学設置基準大綱化に対し教養教育拡大のかたちで対応しようという大規模な作業であった。一見些細な改変のように見えたが、結果的には各専門学部にも深刻に影響する大改革になることが予想された。文学部でも新カリキュラムの件が何かと話題になり、余波が T 教授の耳に入ったものらしい。教授や私が在籍する教職課程は文学部の中にあった。

冒頭の問いに「教務委員会で喋ったんですよ、見かねたものですから」と軽く答えたものの、心中、実は驚いていた。あんな発言が話題になって広がるものなのか。

文学部教務委員会での論議は錯綜していた。新しい事態に文学部はどう即応していくか。語学・文学系科目や人文・社会科学系の科目や専攻教員を多く抱える文学部だけに、無理もない論議が続いていた。新科目の担当教員を迎えることになったらどの学科に入ってもらうか。拡大される予定の外国語科目にスペイン語は入るのか、それとも中国語か。ラテン語も立つのか。学部で紛争後に創設してきたテーマ付き総合科目をどう運営するか。模索が続いているようだった。

No. **58**

私は委員長の依頼でたまたま臨席していたのだが、思わず言ってみた。

「先生方はカリキュラムのことを議論されているんですね。そのことを考えるときは、教育学には古典的なものですが二つの枠組みがあるのです。英語では第一にスコープ(範囲), 第二にシーケンス(系列・順序)です。スコープというのはカリキュラムを横に見た場合の内容的な広がりの中で、多くはカリキュラムに組み込む専門学の範囲とレベル(水準)をどう設定するかという問題になります。先生方が今議論されている授業科目の種類や単位数といった話はこのスコープ論に当たります。

ところがシーケンスは違います。それはカリキュラムに内包され表示されている内容、具体的には授業科目を、学生や生徒たちに対して、どの段階で、どのような基礎の上に学習させるかというテーマになります。学習者である学生の心理的条件を考慮しつつ、教育内容や学習経験を配列しているかどうかという話になります。その結果、スペイン語を置くか置かないかではなく、置くとしてもどの学年で学ばせるように設定するか、また内容となるスペイン語をレベルに分けるとすればそれぞれのレベルをどのような順序で学ばせるかといった話になります。英米の大学では内容のレベル構成と学習順序を重視して、同名称の科目にも『スペイン語A』とか『スペイン語B』といった記号や番号を付けて配列表示して、学生たちが登録する順序を示しているのです。

私は前の大学でもカリキュラム改革に参加しましたが、どの大学でも、先生方は学科目の種類や数の問題には熱心でも、学習心理学的な考慮も必要なこのシーケンス論は苦手ようですね」。

雑な発言だったが、教務委員の先生たちは直ちに理解され、新教養カリキュラムをどう受け入れるかについて話はぐんと進んだ。そしてT教授が驚いたように、シーケンスという言葉と観点は、他の委員会の議論や教授同士の雑談にもたちまち広がったのだった。

小さな体験である。境界領域授業科目の設定が必要になったり、複数の専門分野の融合が求められたりする最近の大学状況のもとではさらに複雑な議論が行われていることだろう。だが同様の体験は私の体験だけでも一、二にとどまらない。

法科大学院が発足して数年後の時点には「教授たちに『授業』とは何かという話をしていただきたい」という法人の要請を受けた。東京のある文科系私学の大学院である。司法現場から大学院に集められた先生方にとって、他者に何かを伝えるという経験としては「弁論」や「尋問」などがあるだけらしく、大学院の教壇の上で困惑しておられた模様であった。そこで、授業には「導入」や「展開」「比較」そして「総括」がある、また講義形態と実習形態とさらにそれらを総合した「実技指導」という方法もあります、と語ったうえで、「今では、授業とは知識の授受活動ではなく、教師と子どもたちとが織りなす文化創造活動である、と考える研究者たちがあるほどです」といった話をして、大いに感謝された。

2000年代の初めにFDが義務化されたとき、所属する大学教育学会から頼まれた基調講演の題は「大学教員と初等・中等学校教員——求められる能力の異同」というテーマだった。能力の相異よりもむしろ同質性の方を詳しく聞きたいというのが企画担当委員会の要望だった。明治維新以後初等中等教育界では絶えず教師像の変転と新展開が起こり、それに基づいて教授能力の養成が変わってきたこと、大学自治事件のたびに繰り返された大学教授論とどこが共通しどこが違うかなどを詳しく話した。若い層の会員からは「ふだんあまり聞かない大学教員のFDの特徴が分かってさわやかでした」という感想が寄せられた。近年には国立総合大学院大学でのシンポジウムに招かれて「大学院教育に何ができるか」という基調講演を行ったこともある。戦後における大学院教育の移入経緯と課程制度導入の不徹底、論文博士を残した資格制的意識、その結果である研究指導の不徹底といった問題を詳しく述べた。科学史研究者の学長からは「寺崎先生からは少数意見をうかがったのかもしれませんが、たいへん示唆に富む内容でした」と感謝された。

スコープとシーケンス、授業論、教師像、教員養成論、研究指導の課程制と資格制——。どれも教育学の世界ではごく普通のアプローチや論題である。しかし一歩外に出ると意外な効用を発揮するというのが、あらそえない実感である。

日本の大学で教育学者たちが「教育研究の範囲ではない」と軽視あるいは無視してきた大学教育・高

等教育研究は、半世紀も前から否応なく全大学教員の共有課題になっている。その局面で教育学の概念や教育学者の寄与が有効な働きを示せるかどうかは、教育学の存在理由を左右することになる。他方、教育学の概念や成果は、明治維新以来百数十年間積み上げられてきた。それらは大学教育の実践や改革課題の遂行にとって決して無効なものではない。それどころかシーケンスの例のように、特にカリキュラム改革といった局面では思わざる効力を発揮する瞬間が少なくない。

教育学は長い間、子どもの成長をテーマとして、親・教師・地域・国家そして科学・文化・芸術等が交わる微妙な接点を研究の対象に据えて、苦闘してきた。その成果を大学世界に推し出して、多くのディシプリンの中で鍛えられる時、教育学ディシプリンは専門科学としての自身の活性化も迎えることができよう。今後教育研究の焦点は青年、成人、いや人間の生涯全体に広がり、教育学は従来の枠を脱ぎ捨てて総合的人間科学たらざるをえないからである。

教育研究者たちが大学改革や研究の場にフランクに乗り出すとき、大学教育改善の場は実践的な共通テーマをめぐって多くの専門学ディシプリンが交わり合い豊かになるフォーラム(広場)になるだろう。その中から新しいディシプリンも生まれよう。本誌もその場の一つになればと祈り、超高齢の身を恥じずに声援を送りたい。

センター長就任の挨拶



山田 浩之

(広島大学高等教育研究開発センター長／
高大接続・入学センター長／人間社会科学研究科教授)

2025年度より、高等教育研究開発センター長に就任いたしました。よろしくお願いいたします。

私にとって高等教育研究開発センターとは研究の原点とも言える場所です。大学院に進学する前、大教センターと呼ばれていた時代からお世話になり、金子元久先生を始めてとして数多くの素晴らしい先生方や友人に出逢った場所でもあります。そこでの交流からさまざまなことを教わり、研究の面白さにも気づくことができました。それが現在の私の研究活動にも大きな影響を与えています。

こうしたセンターの優れた人材の出逢いと交流の場としての役割は今も変わっていません。その役割をさらに広げることで、センターの研究をいっそう充実したものにしていきたいと考えています。そのためにもぜひ皆さまからのご助力や叱咤をお願いいたします。

また、今回、私は広島大学の高大接続・入学センター長も併任することになりました。さまざまな大学改革が求められる中、高等教育研究開発センターへの期待も大きくなっています。大学教育の検証や改革の提案もセンターから積極的に行っていく必要があるでしょう。私が高大接続・入学センター長を併任するのもその期待の表れかと考えています。入試に限らず、多くの領域で大学改革とその検証に貢献するとともに、それを研究成果としてアピールできる場にしたいと思います。その点でも皆さまのご助力をお願いいたします。

全国大学教育研究センター等協議会開催報告

大膳 司

(広島大学名誉教授／上席特任学術研究員)

8月21日（水）・22日（木）の2日間にわたって協議会を一部ハイブリットで開催しました。

全体のテーマは「大学における教育DX—その期待・現状・課題—」でした。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、世界全体にデジタル化の飛躍的進展をもたらしました。今後、社会全体のデジタルトランスフォーメーション（DX）、メタバース活用、AI活用等の推進に向けた環境整備が加速していく中で、教育の分野においてICTを活用することが特別なことではなく「日常化」するなど、デジタル化を更に推進していくことが不可欠です。これまで、多くの大学においてICTは、既存の教育・研究や支援事務業務の基本形態を変更することなく、業務効率化の手段として導入され活用されてきました。各大学において、これまでどのように教育DXを進めてきたのか、今後どのように教育DXを進めようとしているのか、その際に、どのような課題があるのか、について情報交換し、今後の大学における教育DXに対する可能性と課題について検討することを目的として本年度の協議会を開催しました。

初日は、まず、基調講演者として日本マイクロソフト株式会社から佐美千夏様をお迎えして「大学における教育DXへの期待」をテーマに基調講演をいただきました。その詳細は、News Letter No.27 (<https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/center-data/links/>)の巻頭に掲載しましたのでご覧ください。基調講演に続いて、東北大学、山梨大学、香川大学、愛媛大学における教育DXの事例を報告いただきました。

2日目は、「テーマ3：教育DXの方向性について」「テーマ4：教学IRで大学教育はどのように改善されたのか」「テーマ5：文理融合による教育の意義」「テーマ6：マイクロレデンシャルに関連した取組の現状と課題」「テーマ8：学修ポートフォリオの構築や活用について」「テーマ9：大学教育研究センター等の役割・存在意義」の6つのテーマ別でグループ討論を実施しました。最後にこれらテーマ別での討論内容のまとめを報告してもらいました。

なお、当日の成果についても、News Letter No.27 をご覧ください。



第52回研究員集会開催報告

大膳 司

(広島大学名誉教授／上席特任学術研究員)

令和6年度の研究員集会は、「Society5.0時代における大学院教育—その将来像と課題—」をテーマとして、11月8日（金）13時から実施された。

2021年の「第6期科学技術・イノベーション基本計画」において、「持続可能性と強靱性を備え、国民の安全と安心を確保するとともに、一人ひとりが多様な幸せ（well-being）を実現できる社会」としてSociety5.0が再定義されました。そのような社会を実現するため、知のフロンティアを開拓し価値創造の源泉となる研究力の強化が重要な政策の1つとして提示されました。

さらに、2021年4月に改正・施行された「科学技術・イノベーション基本法」においても、人文・社会科学と自然科学を含むあらゆる「知」の融合による「総合知」によって人間や社会の総合的理解と課題解決に資することが示されました。

このように知の在り方が重要な社会になってきており、知の最先端である大学院への期待はますます高まっているにもかかわらず、日本における大学院生数は、人文・社会科学系は修士課程・博士課程ともに、理工農学系は博士課程において、近年減少傾向にあり、特に、博士課程における日本人学生比率は急減しています。日本の大学院は期待に対応できているとは言い難いと思われれます。

本年度の研究員集会において、世界の国々、特に日本を含めたアジアの国々では、大学院に対する期待・現状・課題はどのようになっているのか、それらの課題に対してどのように対応しようとしているのかについて、大学院の実践や研究に関わっておられる以下の専門家から情報提供いただきました。

トロント大学教授のGlen Jones先生、東京大学教授の横山広美先生には基調講演をいただき、山梨大学教授の埴雅典先生、ソウル大学教授のJung Cheol Shin先生、北京大学准教授のWenqin Shen先生、文部科学省科学技術・学術政策研究所の川村真理先生から情報提供をいただきました。基調講演及び情報提供に対して、大阪大学名誉教授で現高松大学教授の松繁寿和先生と広島大学名誉教授の山本陽介先生からコメントをいただきました。

この度の研究員集会の内容は『高等教育研究叢書』第179号をご覧ください。

(https://rihe-publications.hiroshima-u.ac.jp/research_book/)



国際会議参加報告 Academic Profession in the Knowledge- Based Society (APIKS2024 in Finland)

黄 福涛

(広島大学高等教育研究開発センター教授)

日本チームは2024年10月25日から27日にかけて、フィンランドのハナホルメンで開催された「Academy after Knowledge Society and the Future of Academic Profession」国際会議に参加しました。この会議には、30か国以上の研究者や政策立案者が集まり、急速に変化する高等教育と大学教授職の未来について活発な議論が行われました。

会議の概要

会議は、フィンランド首相府研究・イノベーション評議会の事務局長 Johanna Moision 氏による基調講演「高等教育と研究を取り巻くグローバル環境の変化と課題」で開幕しました。

その後、APIKS 調査の現状報告や国際的なデータ分析が共有され、ドイツの Ulrich Teichler 教授が「国際共同研究の機会と課題」に関する基調講演を行いました。初日のセッションでは、知識社会における大学の役割や大学教授職の変化が議論され、地域ごとの比較分析や性別による外部関与の違いについての発表が行われました。

日本からの共同発表

日本側からは、筆者（黄福涛）をはじめ、有本章名誉教授、大膳司教授、李昕特任助教、Yangson Kim 准教授（オンライン参加）が共同発表を行いました。発表タイトルは「Changing Academic Profession in Japan: Institutional Affiliation and Satisfaction from 1992 to 2017」で、主に以下のような内容が紹介されました：

1. 学問分野の重要性：日本の大学教員の専門分野の重要性は1992年から一貫して高い水準を維持。一方で、学部や大学への所属の重要性は低下。
2. 職務満足度の変化：2007年に一時的に上昇した後、2017年には大幅に低下。
3. 職務負担の軽減：1992年以降、職務負担はわずかに減少。

また、これらの変化は、グローバル化や市場化、新自由主義的改革の影響を受けた国際的な傾向と一致しており、日本特有の要因として、若年層や女性教員の増加、教育重視の役割の台頭、研究成果への圧力の高まりが挙げられました。発表では、職務満足度と負担感を改善するための具体的な政策提言が示され、参加者から大きな関心を集めました。

今後の方向性と新たな国際調査

会議最終日には、新たな国際調査（Future of the Academic Profession: Navigating the Evolving Landscape of Higher Education, Future-AP）に向けた議論が行われ、筆者が新たな国際調査のコーディネーターおよび質問票作成の責任者の1人として指名されました。新調査では、デジタル化、AIの影響、職務満足度、学問の自由、多様性と包括性、持続可能な開発目標（SDGs）への貢献といった新しいテーマが含まれる予定です。

調査は以下のような戦略で進められる予定です：

1. 既存の質問票の整理：不要な質問を削除し、新しいテーマに基づく質問を追加。
2. 国際的な比較性の確保：新たなテーマを含めつつ、過去の調査との比較性を維持。
3. 参加型モジュールの導入：回答者が自分の関心に応じてモジュールを選択できる柔軟な設計。

この会議は、大学教授職と高等教育の未来を見据えた議論を促進する重要な場となりました。日本側の研究者の積極的な貢献は、APIKSの進化と新たな国際調査プロジェクトの基盤構築において重要な一歩となりました。今後も新たな調査プロジェクトの発展において、その役割が一層重要になると期待されています。



メタサイエンス勉強会開催報告

野内 玲

(広島大学高等教育研究開発センター副センター長／准教授)

今年度、広島大学未来共創科学研究本部から当センターに予算の加配があった。その一部の資金から援助を受け、私と清水右郷（宮崎大学）、丸山隆一で立ち上げた「メタサイエンス研究会」と高等教育研究開発センター、そして共創科学基盤センターで連携し、勉強会とワークショップを開催した。

そもそもメタサイエンスとは何か。発起人の一人である丸山がまとめた資料によれば、2010年代末頃より再現性の危機を中心とする科学の機能不全への問題意識から、米国・欧州を中心に「メタサイエンス運動」が盛り上がりつつあるという。ここでの「メタサイエンス」は、科学の記述にとどまらず、研究者資金配分のあり方、学術情報の流通、評価の方法、研究者の多様性、研究カルチャーなどの各面での「社会的営みとしての科学」の改善を主眼におくものである。この文脈での「メタサイエンス」を議論するため、専門分化した研究者・実務者が集まり、それぞれの視点を踏まえた見解を情報交換する場として始めたのがこの勉強会である。各勉強会のテーマを列挙する。

メタサイエンス勉強会

第1回：科学哲学から科学政策・研究公正を考える（2024年8月29日、オンライン）

第2回：「再現性」とその先を考える（2024年11月19日、オンライン）

第3回：科学政策と科学史・科学哲学（2024年12月11日、於 京都大学）

第4回：生成 AI と研究のこれから（2025年1月23日、オンライン）

第5回：科学史から見たメタサイエンス（2025年2月19日、オンライン）

メタサイエンス研究会ワークショップ

（2025年3月1日、於 新宿ふれあい貸し会議室 新宿相模）

各会合には研究者のみならず省庁や資金配分機関からの参加もあり、20～30名程度が結集して多様な問題関心からの議論も行われた。

ここでそれら全ての詳細を記載することは紙幅の都合で不可能なため、興味をお持ちになった方は会合の詳細をウェブサイト*上でご参照いただけたら幸いである（同サイトから登録できる Discord メンバーには各回の講演部分のみを動画公開中）。ここではメタサイエンスという動向の概略と高等教育研究者の関与の期待をお伝えしたい。

しばしばメタサイエンスは“Science of science”とも呼ばれ、科学の活動そのものを定量的な手法で分析し、課題を明らかにしようとする。我々の勉強会ではそうした定量的な方面からではなく、主として科学哲学・科学史・科学技術政策・法学などに軸をおいた質的な方面からアプローチした。過去を振り返れば、これまでも「メタサイエンス」の名を関した取り組みは学術界にあったものの、その名前の下に振られる旗は時代ごとの科学の状態や科学への期待に応じて異なっており、そうした変化を俯瞰的に捉えることが重要だと考えているからである。例えば、再現性問題は医学・心理学の統計的な研究における HARKing や P ハッキングという不適切な行為が原因の一端を担っていると目されているが、その背景には、そうまでして成果を発表しなければならない、研究者を論文数など定量的な指標で評価する（現代の）熾烈な競争的環境がある。また、その他の研究領域でも別の意味での「再現性」が特徴づけられつつある。その一方、その他の研究領域でも別の意味での「再現性」が特徴づけられつつある。ある研究領域に端を発した動向が紐解かれ、問題の根源を暴くということだけに留まらず、どのようにして現状を改善していくかという提案もそうした発展の中で見えてくる。すなわち、科学の危機は、科学の健全性を取り戻す機会ともみなせるのである。

では、なぜこうした科学技術政策にも関わる課題を高等教育の領域が扱わねばならないのか。その理由は、この課題は「学術研究活動とは何か」という根源的なテーゼに向き合う必要性を我々に問いかけるからである。例えば、生成 AI の導入により、昨今の研究開発の速度は加速度的に進展している。その一方で、技術の進展には良い面も悪い面もある。大量生産されたフェイク論文の洪水が押し寄せ、査読対応をする学術出版界も研究者も悲鳴を上げている。真贋をスクリーニングするという余計なステップが必要になるからである。もちろん、論文の捏造・改ざん、仲間内での引用数の水増し、共著者名義の貸し借りなど、定量的な業績評価をハックするという問題は特段新しい話ではない。しかし、知的好奇心に基づく研究の実施、基礎的な成果に基づく応用研究・社会実装といった基本的な学術活動のエコシステムが破綻しかねない状況なのである。高等教育領域としても、そこで手をこまねいて、我関せずといった態度を示すのではなく、学術研究の将来をディストピアから救うために立ち上がるのが重要であろう。

*メタサイエンス研究会 <https://sites.google.com/view/metascience/home>

謝辞：本報告の執筆に際して、丸山隆一氏から許可を受け、同氏によるメタサイエンス研究会内の開催報告を適宜利用した。勉強会の開催にあたっては、広島大学高等教育研究開発センターと未来共創科学研究本部による資金援助を、また共創科学基盤センターには広報の協力をいただいた。この場を借りて謝意を示したい。

2024年度の公開研究会

*肩書は当時のもの（敬称略）

	講 師	テ ー マ
第1回 (2024/5/7)	伊藤 伸介（中央大学） 中尾 走（愛媛大学） 樊 怡舟（広島大学） 野内 玲（広島大学）	数理統計を用いた個人情報とプライバシーに関する問題と研究公正・研究倫理・高等教育研究への含意
第2回 (2024/5/10)	児島 功和（パースル総合研究所）	高等教育研究者のキャリアの多様性：大学研究者から民間企業への転身に関わる考察
第3回 (2024/7/16)	楊 思偉（台湾南華大学）	台湾高等教育の現状と改革
第4回 (2024/7/19)	松宮 慎治（信州大学）	博士学位シリーズ 2010年代の私立大学改革・政策の検証：補助金による政策誘導がもたらしたもの
第5回 (2024/8/26)	デリー・エリオット（グラスゴー大学）	博士課程留学生のウェルビーイングを理解するために
第6回 (2024/8/27)	ダンギニ（ニューカッスル大学） ケルシー・イノウエ（オックスフォード大学）	国際化する大学における留学生の主体的行為とエンゲージメント：英国からの報告
第7回 (2024/8/28)	羽田 貴史（東北大学・広島大学名誉教授） 田中 秀明（明治大学） 佐藤 郁哉（同志社大学） 中村 高康（東京大学） 大場 淳（広島大学） 白川 優治（千葉大学）	高等教育研究資源ナショナルセンター企画 東京大学・国立大学授業料値上げ問題を考える座談会
第8回 (2024/8/28)	櫻井 勇介（広島大学） ダンギニ（ニューカッスル大学） 程 文娟（広島大学） ヤデイ・カオ（ニューカッスル大学）	大学院生の教育スキルトレーニング（プレFD）の実践：広島大学と英国ニューカッスル大学の事例
第9回 (2024/9/18)	林 岳彦（国立環境研究所） 井頭 昌彦（一橋大学） 清水 雄也（京都大学） 清水 裕士（関西学院大学） 筒井 淳也（立命館大学） 中尾 走（愛媛大学） 樊 怡舟（広島大学）	社会科学における計量分析を再考する：重回帰分析やSEMはいったい何を説明してきたのだろうか？
第10回 (2024/11/20)	劉 菡儀（広島大学大学院） 百木 漠（関西大学） 山本 耕平（国際経済労働研究所）	ポスト真実時代における陰謀論と疑似科学の構造
第11回 (2024/11/22)	堀川 優弥（東京大学大学院博士課程）	国際共同研究推進事業 令和6年度採択者による公開研究会 / 高等教育研究資源ナショナルセンター企画 大学職員のプロアクティブ行動が起きにくくなる原因とは？

	講 師	テ ー マ
第12回 (2024/12/2)	Lee, Eunhye (韓国職業教育訓練研究院)	政府の大学財政支援プログラムの空間的波及効果：韓国の大学と産業界の連携プログラムの事例
第13回 (2024/12/12)	打越 文弥 (ハーバード大学)	The Role of Imagined Futures in Gendered Educational Trajectories: Adolescents' Expectations and Uncertainty in Japanese Selective High Schools
第14回 (2024/12/13)	打越 文弥 (ハーバード大学)	Gendered Parental Preference for College Applications: Experimental Evidence from a Gender Inegalitarian Education Context
第15回 (2024/12/21)	エドワード・ヴィッカーズ (九州大学)	亀か龍か？日本における学問の自由への挑戦
第16回 (2025/2/10)	近藤佐知彦 (大阪大学) 岡田 昭人 (東京外国語大学) 仙石 祐 (信州大学) 中野 遼子 (東北大学) 石倉佑季子 (大阪大学) 鍋島 有希 (桜美林大学) 千葉加恵子 (国際教養大学) 末松 和子 (東北大学) 櫻井 勇介 (広島大学)	書籍出版公開会 『International Student Mobility in Japan: Higher Education in the Era of the New Normal』
第17回 (2025/2/26)	濱中 淳子 (早稲田大学) 村澤 昌崇 (広島大学)	人文社会系研究者における男女共同参画の現状と課題
第18回 (2025/2/28)	樊 怡舟 (広島大学) 小泉 昌紀 (NEC) 池田 亮介 (株式会社 hootfolio)	アイデアを行動に変える：大学 IR の羅針盤ワークショップ
第19回 (2025/3/4)	平尾 智隆 (摂南大学)	大学の質と初職：日本の労働市場からの洞察 + 英語論文投稿秘話 (苦労話)
第20回 (2025/3/21)	速水 幹也 (名古屋大学大学院/椋山女学園大学)	専門職の『量』をめぐる政策過程：薬学部はいかにして量的に抑制されるに至ったか？

センター往来【2024年4月～2025年3月】

*所属は当時のもの（敬称略）

<2024年>

- 4月 なし
- 5月 川上 悟史（経済産業省）中谷 圭太郎（パリ・サクレー高等師範学校）
- 6月 中谷 圭太郎（パリ・サクレー高等師範学校）
- 7月 楊 思偉（台湾南華大学）Stephen Porter（ノースカロライナ州立大学教育学院）
- 8月 Dely Elliot（グラスゴー大学）Dangeni・Yadi Cao（ニューカッスル大学）Kelsey Inouye（オックスフォード大学）
- 9月 なし
- 10月 島田 賢也（放射光科学研究所）Ahmad Firdaus bin Ahmad Shabudin・Norlela Binti Hashim（セインズ大学）
- 11月 **第52回研究員集会招聘者**〔Glen Jones（トロント大学）横山 広美（東京大学）塚原 修一（関西国際大学）埴 雅典（山梨大学）Jung Cheol Shin（ソウル大学校）Wenqin Shen（北京大學）川村 真理（文部科学省科学技術・学術政策研究所）松繁 寿和（高松大学経営学部教授／大阪大学名誉教授）山本 陽介（広島大学名誉教授）〕羽田 貴史（東北大学・広島大学名誉教授）堀川 優弥（東京大学）Kim Eunyoung（北陸先端科学技術大学院大学）
- 12月 長井 寿・上垣内 茂樹（APRIN）Lee Eunhye（韓国職業教育訓練研究所）

<2025年>

- 1～2月 なし
- 3月 小竹 雅子（三重大学）坂詰 貴司（芝中学校・芝高等学校）飯吉 透・佐藤 万知・田口 真奈（京都大学）

新任者・離任者から一言

2024年度客員研究員



小泉 昌紀(こいずみ まさき)

日本電気株式会社
コーポレート事業開発部門
シニアプロフェッショナル

NECの小泉と申します。このたび貴大学高等研究開発センターの客員研究員を拝命いたしました。このような機会を与えていただき、大変光栄に存じます。私は新規事業開発を担当しており、マーケティングや人的資本に関するデータを活用して、企業の問題解決や顧客価値につなげる活動や教育に取り組んでいます。近年、大学でもEBPM(エビデンスに基づく政策立案)が重要な流れになっており、企業でのマーケティングの考え方や取組み事例が高等教育にも貢献できる可能性を感じております。貴センターでの活動を通じて、少しでも高等教育研究の発展に少しでも寄与できれば幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

※2024年12月より客員研究員にご就任頂きましたので、今号にてご紹介させていただきます。

2025年度客員研究員



池田 亮介(いけだ りょうすけ)

株式会社 hootfolio Delivery Lead

この度は、広島大学高等教育研究開発センターの客員研究員を拝命し、大変光栄に存じております。私は2015年にNECに研究開発職として入社した後に新規事業開発部門へ移り、2025年1月より株式会社 hootfolio の創業メンバーとして活動しております。もともとNECで開発していた因果探索技術を弊社に事業移管し、さらに本事業に集中した体制で事業や研究活動を進めております。主にはマーケティングや人的資本に携わることが多いですが、最近は大学IRやデータサイエンス教育におけるご要望も増え、世の中での高等教育機関の課題の多さを日々実感しておりました。そのようなタイミングで今回の客員研究員のお話を頂き、皆様との連携により相乗効果を生み出せるような研究活動に勤しんで参りたいと存じております。何卒お願い申し上げます。



小山 竜司(こやま りゅうじ)

桜美林大学大学院 国際学術研究科 教授

2月に「知の総和」答申が公表されました。高等教育の「質の向上」、「規模の適正化」や「アクセスの確保」を強調する今回の答申は、当たり前と受け止められたのか、さほど話題を呼んでいるように見えません。しかし、縮小・撤退支援や高等教育財政など重要な指摘を含んでいます。肯定的に評価するにせよ懐疑的に見るにせよ、こうした政策的答申の真価を見定める上では、臨教審・大学審→将来像(2005)→グランドデザイン(2018)→「知の総和」(2025)という系譜を意識し、途中で入り込んだ国立大学法人化の位置づけは別途明確にするなど、思考枠組みの整理が必須です。たとえ地味でも、こうした基礎作業を通じて高等教育政策における「理論と実務の架橋」に貢献できればと思います。



高木 航平(たかぎ こうへい)

関東学院大学
高等教育研究・開発センター 准教授

このたび、貴センターの客員研究員を拝命いたしました。貴重な機会をいただき誠にありがとうございます。これまで、大学の公共性をテーマとした政策言説分析や教員調査、第三領域の専門職に関する研究などに取り組んできました。2024年4月に現職に就きましたが、それ以前は大学職員として国際交流業務などに携わっていました。センターの皆様との交流を通じて、多くを学ばせていただきたく存じます。また、センター資料室にお邪魔するのも楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。



東郷 こずえ(とうごう こずえ)

マイナビキャリアリサーチラボ
主任研究員

この度はこのような貴重な機会をいただき、誠にありがとうございます。私は現在、株式会社マイナビの社長室キャリアリサーチ統括部に所属しており、キャリアに関する調査・研究、およびオウンドメディアの記事作成を担当しており、学生データの提供を通じて、貴センターとのご縁をいただいたことに感謝しております。筑波大学

人間総合科学学術院でカウンセリングの修士号を取得しましたが、大学生のときは広島大学（生物生産学部）で過ごしました。これも不思議なご縁だと感じております。研究者としての経験は豊富ではありませんが、企業の立場から高等教育と職業の連携、人々のキャリア形成について見つめてきた経験を生かし、皆様のお役に立てるよう尽力いたします。どうぞよろしくお願いいたします。



長井 寿（ながい こうぶ）

国立研究開発法人物質・
材料研究機構 名誉研究員

「教育しかやっていない大学で、研究倫理はカリキュラムには入れない」という、一瞬合理性を感じてしまう説明にどう対処していくべきかというのが一つの大きな関心です。単純な思いで、研究大事、教育大事では済まないのではないかと考えています。国立研究所で研究しかやってこなかった身ですが、高等教育研究開発センターの皆さんからこの点で得られることが多いと期待を高めています。また、私は研究倫理とはエンジニアリングの観点から取り組みましたが、研究倫理そのものを捉えるには、他の学術分野から見た研究倫理にも虚心坦懐な関心を持つべきと感じております。ということでどうかよろしくお願いいたします。



松宮 慎治（まつみや しんじ）

信州大学 学術研究院 総合人間科学系 講師
（主担当：高等教育研究センター）

計量分析を使って、私立大学をめぐる問題にアプローチする研究に取り組んでいます。たとえば、私立大学の定員割れがニュースになるわりには、破綻する大学はなかなか増えません。そういう現象がなぜ起こるのかを、いくつかの要素に分解して検討しています。このような作業に従事するとき、データ以前に、まずはさまざまな史料にあたることの重要性を感じてきました。情報調査室という素晴らしい図書館機能を使わせていただいて、よりよい成果を産出できればと考えています。RIHEには2023年度末まで、10年近くにわたって学生としてお世話になりました。このたび賜った貴重な機会を、そのご恩をお返しするための第一歩にできるよう努めます。



柳原 宏和（やなぎはら ひろかず）
大阪公立大学数学研究所・特任教授

この度は、高等教育研究開発センターの客員研究員の機会をいただき、ありがとうございます。昨年度まで広島大学に約19年（大学院先進理工系科学研究科数学プログラムに4年、大学院理学研究科数学専攻に14年9か月）勤務していましたが、この4月から、特任教授として新たな場所に移動し、心機一転、新たな生活をスタートさせました。専門は統計科学で、理論的な内容を中心に研究を行っています。また、理論研究だけでなく、統計解析に関するコンサルティングを行っていますので、研究所の先生方や研究員の方々と様々な連携ができるのではないかと考えています。微力ながらセンターの活動に貢献できるよう努力するつもりです。どうぞよろしくお願いいたします。

※その他、琉球大学グローバル教育支援機構の西本裕輝准教授にも、客員研究員に就任いただきました。再任のためご紹介を省略いたします。また、山本陽介教授（広島大学名誉教授）にも、客員研究員に就任いただきました。前センター長（第15代）のためこちらもご紹介を省略いたします。

2025年度学内研究員



島本 整（しまもと ただし）
大学院統合生命科学研究所 教授

このたびは学内研究員の機会をいただきありがとうございます。私は現在、教育本部教育質保証委員会委員長を拝命しております。教育質保証委員会では、第三者的立場に立った評価機能を有した組織として、本学の教育活動に係るPDCAサイクルの実質化を図り、教育の質の向上・保証に資することを目的とし、各学部・研究科が作成する年次報告書の評価や「学生による授業改善アンケート」、「卒業時・修了時アンケート」の実施に関する検討などを行っています。私の研究テーマは食品衛生学で高等教育とはまったく関係ありませんが、貴センターの学内研究員として高等教育を専門とされている先生方より学ばせていただき、広島大学の教育の質の向上・保証に繋げていきたいと考えています。



スミス 久美子 (すみす くみこ)
国際室国際部留学交流グループ
契約専門職員

この度は、学内研究員としての貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。

私は2022年より広島大学国際室に勤務しております。それ以前は、日本国内および海外の企業で勤務しておりましたが、現在は大学というこれまでとは異なる環境の中で、日々業務に取り組んでおります。

私の業務の一つとして、Student Experience in Research University (SERU) 学生調査があります。SERUは、カリフォルニア大学バークレー校が世界の研究大学に呼びかけて開始した学生調査で、本学では2016年より学部生を対象に1年ごとに実施しております。また、調査実施の翌年には、その結果を中心としたシンポジウムを開催しております。

2024年度には、初めて大学院生を対象としたSERU学生調査を実施いたしました。2025年度もシンポジウムの開催を予定しております。

SERU学生調査結果の分析や解析においては、RIHEの皆様にご協力いただき感謝しております。皆様のご指導を賜りたく、何卒よろしくお願い申し上げます。



高山 和江 (たかやま かずえ)
学術・社会連携室未来共創科学研究本部
研究戦略部研究戦略推進部門部門長
シニアリサーチ・アドミニストレーター

この度は、客員研究員を拝命し、ありがとうございます。

私は、広島大学医学部総合薬学科(現薬学部)の出身です。母校への愛を抱え、4年前に郷里に戻って参りました。

ヘルスケア領域では時に、パンデミック後のワクチン接種の混乱、後遺症への対応など、情報社会における正しい知識の理解のための教養・教育・倫理が必要だと感じております。

高等教育研究センターにおける活動より高等教育について学ばせていただき、母校へ更なる貢献をしたいと思っております。

どうぞ、ご指導いただけますようお願いいたします。



前田 一之 (まえだ かずゆき)
学術・社会連携室未来共創科学研究本部
研究戦略部研究戦略グループ
グループリーダー

この度は、歴史あるRIHEの学内研究員就任への機会を賜り、誠に有難うございます。

RIHEでの研究活動を通じて学位を取得した私にとっては、学恩に報いるうえでも、大変、貴重な機会であり、心より感謝申し上げます。

昨年4月から広島大学への異動となり、着任以降、主としてJ-PEAKSやオープンアクセスといった組織改革の業務に携わっています。大学組織の環境適応に研究関心を有してきた私にとって、現在の業務は興味深いものですが、個人(ミクロ)から大学組織(メゾ)レベルを研究対象としてきたため、大学間・産学連携などといったマクロレベルを射程とするこれら事業に対して、日々、実務上の課題を感じつつも、研究対象として再構築し得ていない非力さを感じています。頂戴した機会を活かし、これら課題にも取り組むことができると考えています。引き続き、ご指導のほど、よろしくお願いいたします。



松原 主典 (まつばら きみのり)
大学院人間社会科学部研究科 教授

本学を代表する研究機関の一つである本センターに学内研究員としてお招きくださり、心よりお礼申し上げます。私は食品

学・栄養学を専門にしており、食と健康の関係、エビデンスに基づいた健康教育、さらにはデータから見えてくる教育的課題に関心を持っております。また、急速に発展している生成AIやデータサイエンスと教育については、あらゆる教育領域で考えていく必要があると感じております。令和7年度から始まる人間社会科学部研究科・教育データサイエンスプログラムにも参画することから、関連する教育の諸課題についてみなさまと議論しながら取り組んでいき、微力ながら貢献できればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

2024 年度離任者



大膳 司 (だいぜん つかさ)

2025年3月末退職

私は広島大学教育学研究科教育社会学研究室で学んだ後、このセンターの前身である大学教育研究センターの助手に1986年4月に助手として採用されました。その時は、広島市内の東千田キャンパス内の旧中央図書館の3階に所在していました。4年間助手を務めて、1990年4月に琉球大学法文学部に異動し、11年6ヶ月後の2001年10月に再び、高等教育研究開発センターに迎え入れていただきました。

助手の4年間と、琉球大学の2年間は、勉強代を支払わなければならない時期でしたが、少しは役立てるようになったと思ったら、退職となりました。

1つの仕事は、誰かのスーパーパワーだけで成立するわけではなく、みんなが同じ方向を向いて各自の持てる力を発揮して成就するものです。リーダーシップも必要ですが、フォロワーシップもそれ以上に重要です。

今後は、側面から支援させていただきます。皆さん RIHE 発展のために協力して頑張りましょう。



魏 琰 (ぎ えん)

博士課程前期修了 (2025年3月)

研究生の期間を含めた2年半の間、大変お世話になりました。村澤先生をはじめ、諸先生方のご指導のおかげで、高等教育について深く学ぶことができ、修士課程を無事に修了することができました。さらに、研究や社会活動を通じてさまざまな経験を積む中で、日本での生活への思いが一層強まり、日本で就職することができました。

このような貴重な環境を提供してくださった RIHE の先生方をはじめ、皆様に心より感謝申し上げます。

いよいよ4月からは、他県で社会人としての生活が始まります。

これこそが本格的な日本での生活のスタートだと考えております。しかし、卒業は広島大学や RIHE とのご縁の終わりではなく、ここで学んだことを活かしながら、生涯にわたり学び続けていきたいと思っております。そして、いつかまた高等教育の領域に戻ることができるよう、一層努力してまいります。

末筆ながら、センターのさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。

修了生



王 春雨 (おう しゅんう)

博士課程前期修了 (2025年3月)

広島西条での生活は、交通の便こそ不便でしたが、その分、静かで落ち着いた環境の中で学業に集中できる貴重な時間でした。自然豊かなこの街での穏やかな日々は、私にとってかけがえのない思い出となりました。

特に、日本に来た当初は、新型コロナウイルスの影響で不安や困難が多く、戸惑うこともありました。しかし、黄先生や友人たちの温かい支えのおかげで、安心して学び、充実した生活を送ることができました。皆さんの励ましには心から感謝しています。

卒業後は、日本で働く予定です。これまで学んだことを活かしながら、初心を忘れず、努力を重ねて成長していきたいと思っています。これからも学びと挑戦を大切に、前向きに歩んでいきます。

最後に、支えてくださったすべての方々へ深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



崔 倡 (さい しょう)

博士課程前期修了 (2025年3月)

広島大学の高等教育学修士課程での2年間は、私にとって大変貴重な時間でした。私の研究は、中国の臨床医学分野における大学院入試制度改革に関するものです。研究する際、日本語の壁に直面することも多く、論文執筆や発表には苦勞しました。それでも、先生方や友人の支えのおかげで、研究を進めることができました。

日本での生活も、私にとって貴重な経験となりました。異なる文化の中で生活することで、多様な価値観を学び、自分の視野を広げることができました。

卒業後は中国に帰国し、大学に就職する予定です。日本で学んだ知識を活かし、中国の高等教育の発展に貢献していきたいと考えています。今後も研究を続け、より良い教育制度の実現に向けて努力していきます。



沈 安南 (しん あんなん)
博士課程前期修了 (2025年 3月)

沈 (瀋) 安南です。私の研究テーマは「中国人留学生の日本国内の進路選択に関する研究—修士課程学生の進学と就職希望の比較—」です。日本での生活は、研究生を含めて約2年半にわたって続けてきました。研究活動においては、黄先生がゼロから論文作成の方法を丁寧に教えてくださり、また他の先生方の授業で高等教育に関するさまざまな研究や最新の情報を学ばせていただきました。さらに、センターの皆様にも多くのサポートをいただき、心より感謝申し上げます。将来は韓国へ留学する予定で、卒業後は中国人向けに日本と韓国の留学エージェントとして起業したいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



陳 嫻 (ちん かん)
博士課程前期修了 (2025年 3月)

2023年から現在にかけて、RIHEでの2年間の留学生生活は、充実したものの、あっという間に過ぎていきました。異国の地での不安や孤独を抱えながらのスタート、努力と緊張の中での受験を経て、誇りと抱負を胸にRIHEに入学しました。ここでは、専門的な知識を学び、関心のある難題に取り組みながら研究を深めることができました。また、多くの先輩や後輩と出会い、吉田先生をはじめとするRIHEの先生方のご指導を受ける中で、知識だけでなく、勇気や自信を得ることができました。視野が広がり、研究をやり遂げる達成感を味わえたことは、私にとって大きな財産となりました。この経験は、生涯にわたって私の糧となる貴重なものであり、決して忘れることのできない大切な時間でした。



李 国鴻 (り こっこう)
博士課程前期修了 (2025年 3月)

日本での留学生生活は、私にとって大きな挑戦であり、成長の機会でもありました。高等教育研究では、「在学生と卒業生の両視点から見る中国の大学における日本語専攻カリキュラム—大連外国語大学を中心に—」に取り組み、文献調査やインタビュー、データ分析を重ねる中で、教育政策の変化や学生支援の在り方について新たな視点を得ることができました。

また日本での生活では、異文化の中での適応力や柔軟性を身につけることができました。

日々の生活を通じて日本の社会や文化への理解が深まり、異なる価値観を受け入れる大切さを実感しました。卒業後は、高等教育の分野で研究や政策立案に関わり、より多くの学生が質の高い教育を受けられる環境づくりに貢献していきたいと考えています。



堀内 喜代美 (ほりうち きよみ)
博士課程後期修了 (2025年 3月)

初めてのRIHE訪問時、黄先生に情報調査室をご案内いただき、高等教育に特化した蔵書や雑誌が整然と並ぶ光景に胸が高鳴ったことを今でも覚えています。新しい知識に触れ吸収することがとにかく楽しかった前期課程に比べ、後期課程では研究や論文投稿の壁に直面し、長いスランプに陥る苦しい期間も経験しました。前期課程入学から8年を経てなんとか博士学位取得まで辿り着けたのは、RIHEの先生方、事務室の皆さまのご指導・ご支援のお陰であり、深く感謝申し上げます。

以前は米国の高等教育モデルにばかり目が向いていた私に、RIHEでの日々は理論研究の奥深さや欧州での高等教育研究の分厚い蓄積に出逢う機会を与えてくれました。これらを糧として、高等教育研究に少しでも貢献できるよう研鑽を積んでいきたいと思ひます。

新入生



蔡 辰淇 (さい しんき)
博士課程前期入学 (2025年 4月)
※研究生 (2024年10月入学)より進学

はじめまして、私は中国北京出身の蔡辰淇です。2024年10月から2025年3月までの間、研究生として多くの先生方や先輩方からご指導とご支援をいただき、心より感謝しております。2025年4月からは、修士としてRIHEで学ぶことになりました。身近な人々が直面している問題をきっかけに、中国の高等職業教育の魅力について研究したいと考えています。2年間の研究生としての学びを通じて、多方面の知識を深め、自身を高めるとともに、自らの研究成果を活かして皆さんのお役に立てるよう努めたいと思ひます。



佐藤 旬 (さとう しゅん)
博士課程前期入学 (2025年4月)

2025年度より修士課程でお世話になります。佐藤旬です。

私はこれまで10年以上にわたり、高等教育機関で教務関係業務に携わってきました。

この実務経験を踏まえ、大学院では「ポストコロナ時代における教務系人材に求められる職能(スキルセット)」をテーマに研究を進める予定です。

大学事務職員として働きながらの院生生活となりますが、実務と研究の相互作用を大切に、知見を深めていきたいと考えています。よろしくお願いいたします。



司 江森 (し こうびょう)
博士課程前期入学 (2025年4月)
※研究生(2024年10月入学)より進学

初めまして、中国の陝西省西安市出身の司江森と申します。学部時代は長安大学で日本語を専攻し、今年の四月から RIHE

の院生として学ぶことになりました。

父が大学教員を務めている影響もあり、幼い頃から大学の環境や教育に強い関心を持ってきました。日本に留学して以来、留学生、特に中国人留学生の学習や生活状況に関する課題に深く興味を持つようになりました。現在は、留学仲介が留学生に与える影響について研究を進めており、今後の研究ではこのテーマをさらに深めていきたいと考えています。

これからは、高等教育に関する知識を深めながら、充実した研究生生活を送りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



武 志鵬 (ぶ しほう)
博士課程前期入学 (2025年4月)
※研究生(2024年10月入学)より進学

初めまして、中国江蘇省出身の武志鵬と申します。大学で日本語を履修し、2024年10月から研究生として広島大学で学び始めました。今年4月より博士前期課程に入学いたしました。

高等教育の普及に伴い、学生の学習意欲や授業参加度の格差の拡大が深刻化しています。特にコロナ禍以降、遠隔授業が普及したことで、隠れ欠席の形態が多様化し、管理が一層困難な状況に

陥っています。私は学部生時代にこの現象を実感し、隠れ欠席に焦点を当てた大学生の学びの現状について研究に取り組みたいと考えています。

これから2年間の修士課程において、高等教育に関する知識を深めるとともに、学術的能力の向上に努め、論文執筆に全力で取り組んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

余 奕岑 (よ えきしん)
博士課程前期入学 (2025年4月)
※研究生 (2024年10月入学)より進学,
3+1プログラム特別聴講生
(2023年10月入学)



はじめまして。2024年4月より博士前期課程に進学する中国・重慶出身の余奕岑です。

私は中国の四川外国語大学日本語学院を卒業し、2023年9月に広島大学の3+1プログラムに参加しました。2024年10月からは研究生として学び、2025年4月より高等教育研究開発センターの大学院生として研究を進める予定です。

私の研究テーマは、中国の大学におけるキャリア教育の探究です。特に、授業内容や指導方法に焦点を当て、より実践的で効果的なカリキュラムの構築を目指しています。研究を通じて、現行の就職指導プログラムの改善に貢献し、大学生の就職スキルやキャリア意識の向上に寄与したいと考えています。

今後の2年間、多様な分野の知識を幅広く学びながら専門性を高め、視野を広げていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

Lai Thu Ha (ライトウー ハー)
博士課程前期入学 (2025年4月)
※研究生(2024年10月入学)より進学



私はベトナムから参りました、ライ・トゥー・ハーと申します。この度、先生方、先輩方、事務室の皆様の温かいサポートのおかげで、博士課程前期に進学させていただくことができ、心より感謝申し上げます。

私は日本の高等教育に興味があり、より深く学びたいと考えております。将来的には、日本での経験を活かし、ベトナムの高等教育の発展に貢献したいと考えております。

特に、国際化が急速に進む中で、高等教育の方向性や課題に対してどのように対応すべきかを探求し、貢献していきたいと考えております。

現在の私は未熟であり、学ぶべきことが多くあ

りますが、先生方、先輩方、事務室の皆様の温かいご支援、そしてRIHEの充実した専門図書を活用しながら、努力を重ねることで、良い研究成果を生み出せると確信しております。
今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



李 沐瑶 (り もくよう)

博士課程前期入学 (2025年4月)
※研究生(2024年10月入学)より進学

はじめまして、中国新疆出身の李沐瑶と申します。4月から広島大学高等教育研究開発センターの修士課程に進学します。

私の研究は、日本における国際共同学位プログラムが大学院生のキャリア意識に与える影響を探ることを目的としています。近年、大学の国際化が進む中で、これらのプログラムが学生のキャリア形成にどのような役割を果たしているのかを明らかにしたいと考えています。

また修了後は、日本の留学生支援に関わる仕事に就き、より良い学習環境の整備に貢献したいです。在学中は研究に励むとともに、多くの学びを得られるよう努めたいと思います。RIHEでの学びを通じて、充実した経験を積めることを楽しみにしています。

※その他、王 婧玲 (2024年4月研究生として入学)さんが博士課程前期に入学しましたが、前号で紹介したため省略。



情報調査室 便り

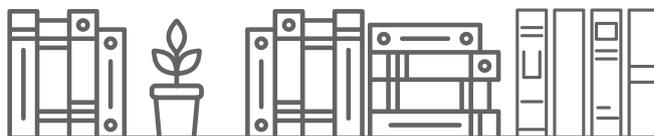
2024 年度の新企画 2 つをご紹介します！

1

特別企画 RIHE 教員おすすめ 図書 2024 年度・冬

RIHE 教員が選ぶ「おすすめ図書」
の紹介ページを公開しました。

<https://rihe-publications.hiroshima-u.ac.jp/winter-2024/>



2

「研究倫理・研究公正」

文献セレクション図書リスト

RIHE 文献情報総合検索サイト

ブックリストで公開中

RIHE 野内玲准教授セレクションの「研究倫理・研究公正」関連図書（和洋）リストを公開しています。

研究倫理・研究公正を学ぶ際の参考となりますので、ぜひご覧ください。

紹介図書は全て情報調査室（資料室）の特設コーナーに配架しています。貸出（相互貸借含む）可能です。

